

木下一雄著『教育哲学』

讃 岐 和 家

本書は、著者の前著『教育倫理学』の後を承けて、人間性の開発を本質とする教育の基礎となる諸条件の原理を歴史的・社会的、且批判的に樹立することを目指して為された研究である。研究は十章の本論、即ち第一、教育哲学 第二、教育対象としての人間性 第三、教育環境としての社会 第四、人生の目的 第五、道徳性 第六、自由論 第七、民主主義と教育 第八、知識と真理 第九、教育の世界観的基礎 第十、人格（性格）の完成、と二章の補説、即ち第十一、世界市民と教育 第十二、時代と思索とより成っている。著者の所説は大要次の如くである。

一五六

教育哲学は、教育は如何にあるべきかについての研究であり、具体的に言えば、教師の教育に於て達成すべきこと、学校の目的、教育目的の実現に要求される方法、選択すべき価値等についての原理に関する考察である（第一）。

教育の本質を論ずるに当つては、先ず教育の対象となる人間自体の本性が考えられねばならない。これは差当り一個の生命体である。生物学的存在としての人間の本質は他の生命体の本質と同様合目的的に動くことにある。かかるものとしての人間にあつて精神は身体と離れることなく、環境と人間とは一体である。人間の生活は生物学的にみて環境との相互作用である（第二）。

教育環境としての社会は、生物学的生命が栄養と繁殖を続けるように、その生活様式の維持及び社会自身の進歩発展を計る。この営みが個々の児童の育成と共に教育の二つの意義である。この意味で教育は社会の伝承と同時にその変化をも要素とせねばならぬ（第三）。

教育の目的は人間の目的から考えられねばならぬ。人間の本性についての規定には、理性的動物、道徳的特性をもつ被

造物等があるが、何れにせよ人間性は次第に形成せられゆくもの、よりよき世界の方に成長しゆくものであり、理性とか道徳的特性というポテンシアルな能力を与えられて、完全な形に成長する機会を持つてゐるものである。この能力の開発には社会的生活を欠くことは出来ない。従つて人間の目的は「協力による自己表現 co-operative self-realization」である。最高の価値、従つて又人間の目的は、個人或は社会の幸福に基くものとしても規定されたが、然しこれは社会にはなくて、人格にある。すべての社会的調整、社会の組織は人格の完成及び発展の為に役立つよう規定されねばならない。快の感情も完全を求め得た時の感情である。他方、人生の課題は社会的生活への参与、文化の発展への参与にあるともされる。然し、文化への参与なしにでも道徳的人格の価値は存在するから、文化の創造が意味をもつのも人格の完成に関わる限りに於てである（第四）。

道徳性は徳及び習俗として考えられる。^{アレテー}徳をギリシヤ哲学史に即してみるならば、これは最初諸々の技術に於ける有能さであつたが、次第に^{アルケ}原理に関する知識となり、ソクラテ

スに於て知と徳は同一と考えられるに至つた。習俗としては道徳性は個人及び社会の幸福を増進する行為の法則である。道徳の本質及び道徳評価は恒常であるが、我々に道徳とみえるものはそうではない。可變的な道徳現象中にある不變の要素を生活内容に取り入れ、意志や行為を形成することが道徳的進歩である（第五）。

道徳が存在する為にはその本質的条件として自由が認められねばならない。自由には解放、自発活動、選択能力の三つの意味があるが、意志の自由に関しては選択の自由が重要である。自由の問題に関して、意志の決定論及び非決定論をめぐり論議が為されて来たが、カントが機械的因果関係以外の因果関係の存在を明らかにした。人の個性の十分の発現の為、社会生活に於ては自由がなければならぬ。この自由は、ラスキの説く如く、正義、殊に経済的な正義としての平等の行為を離れてはならない。教育の大きな眼目は人間を自由人になまで育成することである（第六）。

現代社会の理念は民主々義であるが、これは二つの觀念、即ち人格の無限の価値の承認及びすべての（人の）福祉を増

進する為の活動を為し得る信念の保持より成る。民主的な在り方は、その一例としての米国の歴史を辿ることによつて明らかとなる。教育の根本課題である人間の自己実現が為されるのは民主主義的社会に於てである（第七）。

知識への欲求は人間の本性である。知識の性格に関して、それを経験的なものとする経験論と、理性的なものとする唯理論（合理論）とがあり、哲学史上の論争となつて来たが、カントは『純粹理性批判』に於て両契機より成ることを解明した。真理に関してプラグマチズムはそれを有用性に基づけ、我々の持つ知識をそのまま真理であるとする。我々は個々の知識の変動にも拘らず、真理そのものを理解する可能性のあることを考えねばならぬ（第八）。

教育の把握には人間性、人生の意義、社会生活の目的、此の世界に妥当する善等についての理解が要求されるが、これらに関する論究が教育的世界観である。その歴史は、アメリカに於てはアイディアリズムからプラグマチズムを通り、エッセンシアリズムに至つており、ドイツでは人格的教育学、現象学的教育学、批判的教育学、精神科学的教育学を経て現

在に至つてゐる（第九）。

教育に於て重要なものは性格、即ち価値評価を持てるものとしての人格の形成である。性格教育の方法には、道徳に関する知識の教授による直接的方法、生活の全場面を通じて指導する間接的方法があり、又教インストラクション・示・訓・練・鼓トレーニング・舞インスピレーションの方法がある。グループ内での討議も有効な方法である。性格教育の場面は学校のみでなく、家庭はじめ全社会である。宗教及び芸術と科学は性格形成に大きな意味を持つ。宗教の一例としてキリスト教は完全な人間の理念をキリストに於て与える。芸術と科学は児童の創造的自己活動を覚醒し、助長し、強化する（第十）。

以上の本論の後、補説に於て著者は原子力時代到来による世界市民育成の為の教育の要否、及び思索の時代に対する意義に関する考察を述べてゐる。

著者は序文に於て教育哲学の課題を、教育の基礎となる諸条件の原理を歴史的・社会的且批判的に樹立することにあると規定している。この見地から本書に於ては教育に関する諸

条件が、ギリシヤより現代に至るまでの思想史及び現代社会の諸状況との関連に於て広い視野から考察されている。然し乍ら、著者は又哲学を以て全く正当にも総合的認識であり、且事象をそのあるべきすがたに於て追求する学とも規定している。この見地から見るとき、本書の体系には事態の総合的把握及び本質規定の厳密さの点で十分ではない所があるように思われる。独断は避けられねばならないが、事態のあるべきすがたは多くの謬見に迷わされずに真理を選び取ることにより把握されねばならぬ。このような意味での教育哲学こそ、教育実践の場の求めるものであろう。教育なる現象を考察する視点は数多いが、今は教育の本質、その主体と客体、その方法と内容の三点から本書をみることにしたい。

教育が何であるかについての規定は本書に於ては教育的目的、課題に関して為されている考察の中に見出される。著者によれば、教育は、それを以て「社会的生命がみずからを伝承しゆく」(四九頁)事実であり、「一人一人のこどもは人間になり、社会はそれみずからの生活様式の維持を計り、社会を進歩発展させる用意をすることのできる」(五〇頁)ものである。

あり、又人間の課題である自己表現の助成である。然しこの社会的生命体の必然性としての、及び他の個人の自己表現への助成としての二様な教育活動の根柢に、より本質的な特性があるように思われる。即ち、「人間は教育されなければならぬ唯一の被造物である」(カント)と言われる如く、教育には当為としての性格がある。教育の活動は教育者、被教育の両者間に在るべき人倫的關係と規定されるのが妥当ではないであろうか。そして両者を結ぶ理法が教育の目的となるのではないであろうか。教育の目的は人間の目的に基づくべきであるとの著者の考えもこのことを意味するものと思われる。

教育の主体に関しては、教育する者は社会的生命体としての社会としても考えられ、又学校、教師等と考えられてもいるが、一般に個人であれ、共同体であれ、何らかの意味で被教育者を越えるより包括的な存在者と考えることが妥当であるように思われる。著者が教育を単に個人のこととせず、社会のこととみるのも、又教育を単に自然についたものとして、理性乃至人格のこととみているのもこの限りに於て適切である。教育の客体に関してははじめ生物学的存在としての

人間が考えられ、後には人格としての人間が考えられ、本質的にはポテンシアルな能力を賦与されたものとされているが、この場合自然と理性の綜合としての本質とポテンシアルな能力としての本質の關係が不明確であるように思われる。

教育目的に関する多面的な、そして深く掘下げられた以上の考察に引きかえて、この教育目的達成の為の方法についての考察は少い。即ち、道徳性に関する分析、知性に関する分析、及び人格（性格）の完成に関して考察が為されたに止まる。教育方法の一般は教育の本質が規定されると共に自ら定まるのであり、協力的自己表現への助成なる教育目的に対しては創造力、合理的思惟力の發展が目的とされている以上、これ以外の規定を必ずしも要求としないとも言える。然し、教育方法に関連して、宗教、芸術、科学のみでなく、それら以外の文化財の教育に対する意義、総じて教育課程一般の規定が看過されてはならないように思われる。

人間の課題を協力的自己表現と規定し、これへの助成としての教育の原理的問題を歴史的及び社会的に多くの側面から

考察している点に我々はこの書の意義を見出すことが出来る。

前号目次

巻頭のことば

ICU教育研究所設置の趣旨とその課題

日高第四郎 一

研究論文

教育哲学についての一つの主張……………小島軍造 二三

—教育の機会均等の問題に関連して—

エロスよりアガペへ……………秋田 稔 三

—キリスト教教育原理研究への一つの序説—

日本におけるキリスト教教育原理の問題の一齣

—教育と宗教の衝突論争をめぐって—

武田清子 三

アメリカ合衆国の歴史教科書に表われている

日本と日本人の取扱い……………高木とり 四

所 報……………二〇三